

# 酒井家次と伊達政宗の交流

## ―徳川氏内における家次の役割、新出史料の紹介―

菅原義勝

はじめに

出羽国庄内藩主酒井家に伝わった諸資料の多くは、現在、公益財団法人致道博物館に所蔵されている。徳川家康の重臣として知られる初代酒井忠次については、戦前に桑田忠親氏が『酒井忠次公伝』を著して以降、暫くの間まとまった研究は見られなかったが<sup>①</sup>、近年、酒井家庄内入部四〇〇年の周年事業、徳川家康を主役とした大河ドラマの影響もあり、再び注目されている<sup>②</sup>。

忠次の嫡子である二代酒井家次についても、残存史料の少なさも相俟って、これまであまり検討されることはなかったが、忠次と共に近年見直しが図られている<sup>③</sup>。本稿では、まず酒井家次関係の新出史料を三点紹介する。今回取り上げる史料の中心は、陸奥国の大名・伊達政宗が家次に宛てた書状で、慶長年間に作成されたものである。二節で紹介する「御世紀」という史料中には、「此公、(酒井家次)松平陸奥守殿(伊達政宗)とは格別に御懇志被遊しと見へ、御来書数通所々に伝来す」と記載がある。永禄七年(一五六四)生まれの家次と同十年生まれの政宗は、同世代同士懇意にしていたようだ。両者の交流の在り方を知る上でも、酒井家次の縁戚関係を整理し、酒井家次が徳川氏権力内においてどのような役割を期待されていたのかを検討する。その上で江戸時代初期における大名間交流の一端をみることにしたい。

一 十一月二十八日付伊達政宗書状

【史料1】伊達政宗書状

二日之御成に三日之御茶、扨々辱候々々、以上、

御成二日に相定申之由珍重候、三日に御茶可被下之旨  
被入思召、真実々々辱次第候、朝必々可参候、于今歩  
行不自在之躰候間、御礼之義を可有御免候、恐惶謹言、

霜月廿八日

正宗（花押）

（捺封ウハ書）

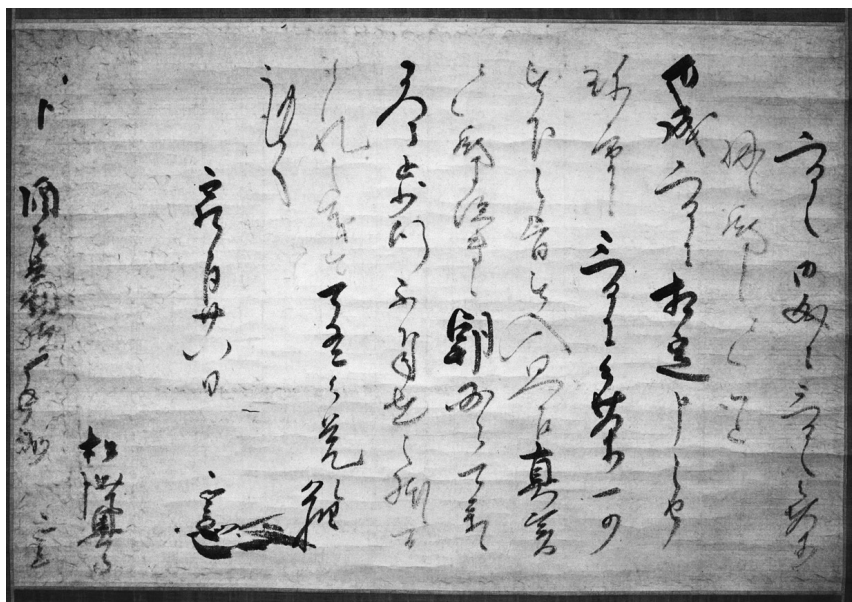
松陸奥守

（墨引）酒左衛門尉様御返酬

正宗

はじめに記した通り、酒井家伝来史料のほとんどは致道博物館の所蔵となっているが、本史料は現在も酒井家が所蔵しており、酒井忠久氏所蔵文書である。掛軸に表装され、本紙は楮紙系、法量は縦三一・八cm×横四六・六cm、花押の法量は縦二・七cm×横八・〇cmである。すでに致道博物館発行の図録にて紹介されているが、ほかの史料集等に掲載されていない新出史料であるため、本稿で改めて紹介するものである。

政宗は自筆文書の多い武将として知られるが、本史料もまた自筆である。奥に署名と宛名を記したウハ書、上部に墨引きがある。もとは折り畳み、上部を捻って封をした捻



【史料1】伊達政宗書状

封であった。政宗の豎紙・捻封の書状の折り方は特徴的で、明石治郎氏が詳細な検討を加えている。<sup>⑤</sup>

内容をみると、まず徳川秀忠の「御成」が十二月二日に決まったことが伝えられている。「御成」とは、將軍家などの他出や訪問のことで、秀忠や子の家光は大名家の邸宅へ多く訪問している。ここでの「御成」は、おそらく家次邸への秀忠の訪問と考えてよいだろう（大御所・家康とも考えられるが、後述する年次比定から考えると家康の可能性は無い）。さらに、政宗は翌三日の茶事の誘いを受けており、三日の朝に必ず家次邸へ伺うと述べている。ただし、足を痛めていたのか、体調が優れなかったのか、「歩行不自在」であるため「御礼」は御免する旨を伝えている。茶事には前礼と後礼がある。「歩行不自在」を理由に、茶会の前日あるいは翌日に家次邸へ挨拶に伺う「御礼」を御免させてもらっていることが分かる。

続いて作成年代について。本書状の作成者である政宗が陸奥守を名乗るのは慶長十三年（一六〇八）一月、宛名の家次が亡くなるのは元和四年（一六一八）三月であることから、まず慶長十三年から元和三年の間に絞られる。さらに、その間で十一月十二月頃に政宗が江戸に居る年は、慶長十三・十五・十六年、元和二・三年である。元和二・三年は十二月一日、または二日に久喜の鷹場へ鷹狩りへ行っているため除外される。残された慶長十三・十五・十六年のうち、十三・十六年は情報に乏しく政宗や家次、秀忠の動向を見極めることは難しいが、慶長十五年は、「当代記」の十二月朔日条に「將軍茶会ニテ各宿所工入御」と記載がある。一日の誤差はあるものの、秀忠が茶会のために「各宿所」へ入っているという情報は【史料1】と通じるため、ここでは慶長十五年作成と比定しておく。なお、大御所・家康は、慶長十三・十五・十六年のいずれも江戸に不在である。<sup>⑥</sup>

## 二 「御世紀」所収の伊達政宗書状

嘉永二年（一八四九）から同七年までの間に庄内藩の藩史編纂事業で作成された「御世紀」には、初代忠次から五代忠義までの事績がまとめられている。本書には一次史料の写も収録されており、家次の事績のなかでは三十四通分の一次史

料が挙げられている（うち一通は天正十年の北条氏規書状で、ほか三十三通は慶長五年以降のもの）。そのうち政宗発給の書状は【史料1】の写も含めて八通あり、最も多い。家次と政宗の関係性については四節で改めて検討するが、ここでは「御世紀」収録の政宗書状のうち、『仙台市史』等史料集に掲載されていない二通の史料を紹介する。令和四年に致道博物館から『庄内藩主酒井家史料集2 御世紀』として翻刻・発刊されているものがあるが、この場をお借りして改めて紹介する。<sup>7)</sup>

### 【史料2】伊達政宗書状写

日本之神は今日わたり、内々路次迄も以飛脚可申入与存候所、今朝早々より数寄二罷出遅々仕候、則御捻、殊小袖五ツ、如御書面預之候、幾久辱次第候、然者先日鷹野二居申候時分、御音書中二去年御茶不申候由□□候、我等者必々申入候与存候而有之事二候、然者数寄之覺書罷帰見申候得者、貴老様へ于今御茶不申候、物之不審此事二候、右御茶申候時分、御在所に御座候間、書付□□仕候て置申候キ、失念申候事、物のばちにては御座候哉、来九日・十日両朝間二御出可辱候、恐惶謹言、

正月五日

政宗

松陸奥守

メ 酒左衛門尉様

政宗

人々御中

### 【史料3】伊達政宗書状写

以上

一書令啓候、何頃御在所江御越候哉、近日藤泉州江御成之由候、定而其刻迄在、可為御逗留候哉、来七日・八日頃者拙宅二而能興行可仕かと存候、御手前へもいつそ不図見申度与、又右与も申候キ、尚面上申度候、恐惶謹言、

五月廿八日

政宗

松陸奥守

メ 酒左衛門尉様

政宗

人々御中

【史料2】【史料3】は、【史料1】と同様に自筆で豎紙・捻封の書状であったと考えられる。<sup>⑧</sup> いずれも政宗と家次の良好な関係性を示す史料である。

【史料2】では、家次から「御捻」（＝捻封の書状）と小袖が贈られたことへの御礼を述べ、昨年中に茶会を開けなかったことを詫げる内容となっている。政宗は先日（＝昨年末）鷹野に居る際に家次からの書状を受け取っていたらしい。その書状には、「去年御茶不申候」と、政宗と茶事を共に出来なかったことを残念がつている内容が記されていた。政宗は家次を茶会に誘っていたものと思っていたが、「数奇之覚書」を確認したら同席していなかったと述べている。政宗が茶の湯に強い関心をもっていたことは知られるところだが、「数奇之覚書」なる記録を作成していたことが分かる。

本書状の作成年代だが、政宗が陸奥守を名乗り家次が在世中の間で、政宗が正月五日の時点で江戸に居る年は慶長十六・十八年、元和三年に絞られる。本文中には「先日鷹野二居候時分」とあるが、慶長十七年は十二月十六日から二十一日まで久喜の鷹場で鷹狩りに勤しんでいる。また、慶長十八年正月七日朝、政宗は家次邸の近所に来ていたので挨拶に伺ったが、家次は留守で会えなかったようだ。<sup>⑨</sup> 【史料2】文末には、「来九日・十日両朝間二御出」とあり、家次が政宗邸へ訪問する予定となっていた。このような状況から勘案すれば、【史料2】は慶長十八年と比定される。

次いで【史料3】。家次に宛てて、いつ頃「御在所」（＝領国）へ帰るのか、藤堂高虎邸への將軍秀忠の「御成」があるので、その時までは逗留するのか、と尋ねている。これは、六月七日か八日頃に政宗邸で能を興行する予定となっており、家次にも来邸してほしいために尋ねているのである。政宗は茶の湯と同様に能楽への関心が高かったことでも知られる。

五月から六月頃に政宗が江戸に居るのは、慶長十三・十八年、元和三年。このうち、慶長十八年は、六月十三日に大役者を招いて能の興行を行っている。<sup>⑩</sup> 七日か八日頃と言っていた日にちから少し延びてはいるが、本史料の能はこの時の興行を指すものだろうか。他の年次の情報に乏しいため断定は出来ないが、ひとまず慶長十八年と比定しておく。

### 三 酒井家次の縁戚関係と期待された政治的役割

前節までは、三点の新出史料について紹介し、その内容と年次比定を中心に検討してきた。これら史料からも垣間見えるように、家次と政宗は良好な関係を築いていた。詳細は後述するが、両者は遠い縁戚関係をもっており、これも両者の関係性に繋がる場所である。本節では、家次に焦点を当てて周辺の縁戚関係、人脈に伴う天正十八年以降の徳川氏権力内における家次の立場、期待された役割について考えたい。

#### (一) 家次の縁戚関係

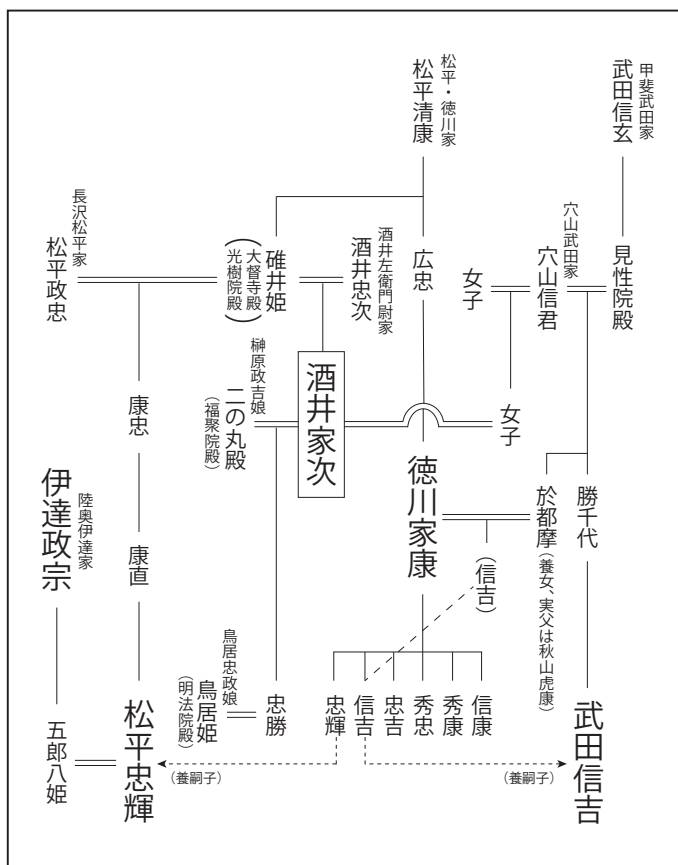
近年、柴裕之氏は、幕府内における家次の立場、縁戚関係を新たな視点から整理している。<sup>①</sup>点と点を線で結ぶ成果であり、家次と政宗との関係性にも言及している。詳細は柴氏の論考を参照いただきたいが、ここでも柴氏の論に学びながら家次周辺の縁戚関係について改めて整理したい。次頁に掲げた図は、家次周辺の関係性を示したものである。以下、適宜参考にしてほしい。

家次は酒井忠次と碓井姫（大督寺殿、光樹院殿とも称す）の間に長男として生まれた。碓井姫は松平清康の娘で、家康の叔母にあたる。家次と家康は従弟関係にある。家次の室は、榊原政吉の娘で二の丸殿や福聚院殿と称し、嫡子の忠勝や二男・直次、三男・忠重を生んでいる。<sup>②</sup>しかし、酒井家初代忠次から五代忠義までの妻子の記録をまとめた「御世紀付録」には以下のような記載がある。

【史料4】「御世紀付録二宗慶公二二の丸殿の項

福聚院殿御事、実は初めよりの御正室にはあらされとも、達三公御誕生被遊。且は榊原も其ころ御簾本衆之歴々にて、筋目正ければ御優待も御格別にて、別に御正室は迎へ給はず。高田御在城之頃より二之丸殿と称し、庄内御移り之後も二之丸西御門之辺二御住居の御殿ありて、二之丸殿と被称しといふ。

二の丸殿は、初めからの室ではなかった。しかし、三代忠勝を生み、家柄も良いため、家次は他に正室を迎えなかった



※柴裕之氏作成の「関係人物系図」（註3講演録掲載）を基に改訂

と記載がある。つまり、家次には酒井家の系譜類にも省略されている正室が別におり、二の丸殿は嫡子や二三男を産んではいるが、側室として二の丸に住んでいた<sup>(13)</sup>のである。

酒井家次

酒井左衛門尉家  
酒井忠次

碓井姫  
大管寺殿  
(光樹院殿)

神原政吉娘  
二の丸殿  
(福家院殿)

長沢松平家  
松平政忠

康忠

陸奥伊達家  
伊達政宗

忠勝

鳥居忠政娘  
鳥居姫  
(明法院殿)

松平忠輝

五郎八姫

忠吉  
信吉  
忠輝

酒井家次周辺人物

※柴裕之氏作成の「関係人物系図」(註3)

では、家次の正室とは誰なのか。「家忠日記」天正十一年三月十七日条に、「吉田酒井小五郎殿江穴山殿娘越候」と記載がある。「穴山殿」とは、穴山武田家当主で前年の武田氏滅亡に際して織田・徳川方に寝返り、その後甲斐武田宗家の立場を引き継いだ穴山信君である。信君は本能寺の変



える。<sup>14</sup>

徳川氏が天正十八年（一五九〇）に関東へ移封された際、家次は下総国臼井を領することとなる。隣接する佐倉領には文祿元年（一五九二）に幼い武田信吉が入った。家次は信吉の叔父である。柴氏は、この縁戚関係を前提に、家次は信吉の補佐役としての役割を期待されたとする。以下、縁戚関係を伴う領国配置について、改めて検討を加えたい。

## （二）臼井入部と武田信吉

まず前提として、家康は何故江戸を拠点としたのか。その理由については多くの議論がある。<sup>15</sup>黒田基樹氏は、小田原合戦前より江戸が北条氏の関東支配における中心拠点となっていたことを明らかにし、関東一帯の支配を任せられた家康が江戸に入部する蓋然性を説いている。<sup>16</sup>また、竹井英文氏は、豊臣（羽柴）秀吉が奥羽支配へ目を向けるなか、江戸が水陸の要衝として重要拠点であった点を政治的・地理的特性を論じながら整理した。<sup>17</sup>

秀吉が家康を関東へ転封させた理由としては、かねてより東国支配構想や奥羽情勢を意識した豊臣政権による政治的意図が前提にあると論じられている。<sup>18</sup>近年では、小田原合戦以前より豊臣政権下において家康が北条氏および北関東諸氏、そして奥羽の諸氏との外交を担ってきたことから、北条氏が敵対した責を負ったとする見解も示されている。<sup>19</sup>

次に、関東転封後の家臣団および徳川一門の配置について。柴裕之氏は、①江戸を中心とする家康の直轄域（柴氏は本領国と表現）、②本領国の周縁部、③関東領国全体の外縁部、以上三つの大枠を設定している。本節で検討する武田信吉は、天正十八年、佐倉の前に小金領三万石へ入っている。この時、家康の義弟である松平康元が関宿二万石、そして康元の娘婿である岡部長盛が山崎一万二千石を領した。康元の娘は家康の養女となっていたため、長盛は家康の義子となる。これらはすべて②の本領国周縁部にあたり、徳川氏一門が配置された。

文祿元年（一五九二）、信吉は佐倉領十萬石へ移封となる。先に述べた通り、臼井三万石を領する家次は信吉と叔父甥の関係であり、家康とも従弟関係にある。当該地域は、もともと大名・千葉氏とその家宰の原氏が本佐倉城と臼井城に居城しながら治めていた。柴氏が述べる通り、両城は地域の政治拠点であり、まさに家次には、未だ幼い信吉を補佐する役



割が期待されていたのだろう。

ただし、時系列でいえば、家次が臼井に移る天正十八年時点で信吉は小金に入っている。小金領の信吉を補佐するために家次が臼井に入ったとは捉え難い。信吉は文禄元年三月に佐倉へ移るわけだが、柴氏は、同時期に武蔵国忍領へ家康の四男・松平忠吉が入封していることに注目。忍領は徳川氏本領国における北の周縁域であり、「忍―佐倉の北・東周縁部の要領域に対する一門衆の本格的配置がこの時に実施された」と評価する。そして、文禄元年に東の周縁領域が小金からさらに東側の佐倉へ再設定されたとする。しかし、何故天正十八年転封当初から佐倉を信吉領とせず徳川氏直轄領としたのか、疑問が残るところである。家次が臼井三万石を任せられた当初の理由と併せて考えたい。

中野達哉氏は、関東転封直後の徳川氏は、在地把握が不十分であり、「大知行取」(中野氏は三千石以上の家臣に設定)とされる上級家臣へは入るべき地・城の指示があったが、それと同時にいはいや遅れて知行高が提示されるに止まったとし、「具体的な知行地(領域)の確定は、そのあと、検地などにより在地把握が進められるなかで行われた」とする。<sup>20)</sup>天正十八年当初、佐倉は徳川氏の直轄領であり、三浦義次や久野宗能等が守衛に当たっていた。<sup>21)</sup>繰り返すが、家次が入った臼井は、小田原合戦によって改易された千葉氏の旧領である。天正十八年の転封当初は地域支配の安定、在地把握が課題であった。

柴氏が注目するように、北の周縁領域とされる忍領に目を向けてみよう。関東転封に伴い、忍領には松平忠吉が入封した。ただし、忠吉が忍城主として本格的な支配を行う文禄元年までは、忍城代として松平家忠(深溝)が入っている。根岸茂夫氏は、忠吉入封までの間、家忠の普請能力に期待し、小田原合戦時の水攻めによって傷んだ城の整備をさせたとしている。<sup>22)</sup>佐藤貴浩氏は、忠吉と家忠の血縁関係に注目する。<sup>23)</sup>忠吉は東条松平の松平家忠の養子となつて東条松平家を継いでいる。同姓同名で紛らわしいが、松平家忠(東条)の妻は、松平家忠(深溝)の妹・ちいはであるため、忠吉は家忠(深溝)の義理の甥である。佐藤氏は家忠(深溝)が忍城代となっているのは、普請上手だけが理由ではなく、このような血縁関係によるものとしている。

こうして考えると、忍領と佐倉領には多く共通項があることに気付く。まず、家康の子で四男・忠吉と五男・信吉が領

主となること。二つの地域に限らないが、天正十八年転封当初は、未だ在地把握が出来ておらず、城の修復や検地などを行い、支配を安定させることが目下重要な仕事であったこと。そして、天正十八年当時、忠吉は数えて十一歳、信吉は十歳と幼く、忠吉が本格支配を行う文禄元年までの間は義叔父である家忠（深溝）が忍城代として領知支配を行った。佐倉領は徳川氏直轄支配が行われ、隣接する臼井には、信吉の義叔父である酒井家次が入った。譜代の有力家臣である家次も、松平一族で有力国衆であった家忠も、縁者として徳川一門の支配を援助し支える役割が期待されたのである。

そもそも家次が佐倉ではなく臼井に配置されたことから考えれば、初めから酒井氏以上の家格をもつ有力な大名、現実的には徳川氏一門を佐倉に配置することが想定されていたのかもしれない。その後の流れからすれば、信吉が佐倉に入ることとは規定路線であった可能性もある。

以上は、信吉が直接佐倉に入らなかった理由としては、「幼かったため」というやや消極的なものである。次に、信吉が初めに小金に入り、家次が臼井に入った積極的な理由も挙げておきたい。

小金や関宿は、北条氏時代より江戸城の支城として重要な拠点であり、会津や宇都宮、つまり奥羽方面へ繋がる主要な街道沿いにあった。<sup>23</sup> 秀吉は小田原合戦の後、そのまま宇都宮、会津へ向かい、奥羽仕置を行っている。秀吉は東国や奥羽支配の最前線に家康を置き、家康もこれを受けて東国・奥羽方面を意識した領国統治を進める必要があった。初めに信吉が小金に入ったのは、奥羽方面の備えという意識よりも、主要街道沿いの拠点を押さえるという意味合いの強い配置であったとも捉えられる。

また、秀吉の意向のもと、本多忠勝は上総国万喜（のち大多喜）十萬石、榊原康政は上野国館林十萬石、井伊直政は上野国箕輪十二萬石に配置されたが、ほかの譜代の重臣層も、領国外縁部に配置された。なかでも、常陸国の佐竹氏と境を接する最前線には、下総国矢作四萬石を領する鳥居元忠が配置されていた。臼井は東国・奥羽方面で異変が起きた際には、鳥居氏と共に対応出来る位置関係にある。鳥居氏は、佐竹氏や境目の領主のみではなく、奥羽諸大名の南下にも備える役割をもち、その後の出羽国山形への移封へも繋がったとする見解もある。<sup>26</sup> 家次には、臼井に入った当初から、鳥居氏と同様に北関東や奥羽方面の備えという役割が期待されていたのである。

天正十八年十月以降、大崎・葛西一揆など奥羽各地で一揆が発生し、「政宗別心」問題などに発展した。奥羽における不穏な動きに対し、同十九年七月には家康と秀次を総大将とする軍勢が江戸を出発。同年九月には奥羽再仕置が行われている。

文禄元年の武田信吉の佐倉領配置換えは、まさに奥羽に対する仕置が一段落着いた後のこと。信吉を佐倉十万石へ移すことで、鳥居元忠が守る東の境目の防御がさらに固まることとなる。信吉は、豊臣政権の意向のもと進められた奥羽情勢への介入という、いわば「攻」の態勢のなかで交通の要衝である小金に入り、北関東や奥羽情勢を見守り、防衛線を張る「守」の態勢へと転じるなかで佐倉へと配置換えされたと言える。

以上のような段階を踏み、千葉氏支配以来の重要拠点であり、北総地域や房総半島の要にあたる佐倉領・白井領支配が着実に進められた。家次がこのような役割を担うこと自体は、酒井氏の家格の表れであり、家康との従弟関係、信吉との縁戚関係があったことに拠る。

因みに、何度も述べるように家康と家次は従弟関係であったが、家康も家次も穴山信君の娘と婚姻を結んでいるため、両者は系図上で言えば義理の兄弟でもあった。信吉との叔父甥の関係も信君を通してのことである。家次の正室であった信君の娘については、全く記録が残されていないことからすれば、早くに亡くなっているのかもしれない。側室の二の丸殿が嫡子となる忠勝を産んだのは文禄三年（一五九四）、家次三十一歳（数え）の時である。二の丸殿はその後も二三男を産んでいる。【史料4】では、二の丸殿の出自である榊原氏は筋目正しい家柄なので「別に御正室は迎へ給はず」としているが、家次が継室として新たに正室を迎えなかったのは、穴山武田家を介した徳川家との繋がりを意識してのことかとも思われるのである。

### （三）家次と松平忠輝

慶長七年（一六〇二）、武田信吉は常陸国水戸二十五万石へと移封する。これに伴い、佐倉領には松平忠輝が入っている。忠輝は家康の六男で、長沢松平家の養嗣子となって家を継いだ人物である。家次の母である碓井姫は、はじめ長沢松平家

の当主である松平政忠に嫁いでおり、桶狭間合戦で政忠が戦死して以後、酒井忠次に再嫁している。忠輝は碓井姫の曾孫、家次の又甥にあたることとなる。柴氏は、このような関係性から、再び縁戚関係のある松平一門を補佐する役割を担ったとする。さらに、忠輝が慶長八年に信濃国川中島十四万石へ移ると、翌年、家次は上野国高崎五万石へ移封する。縁戚関係をもち忠輝の補佐役として、家次には越後国を見据えた関東外縁部の押さえという役割が期待されたとしている。

忠輝は慶長十五年に越後国高田三十万石を増されたものの、元和二年（一六一六）に改易となる。そして、家次は跡を引き継ぎ、高田十萬石を領することとなる。これらの因縁は、家次と忠輝の縁戚関係によるものと捉えられるものの、それがすべてではない。

忠輝は家次の又甥で四親等にあたり、家次と家康も従弟で四親等である。家次は元和四年に亡くなるが、跡を継いだ忠勝は、その後すぐに信濃国松代十萬石へ移され、高田には松平忠昌が入ることとなる。すでに家康は元和二年に亡くなっており、將軍秀忠と忠勝とは、はこの六親等という遠い血縁関係となっていた。福田千鶴氏は、このことから忠勝には「越後を領有させるための必要充分条件が満たされていなかった」と述べ、さらに、「酒井家次は譜代大名ながら、徳川家康との親しい血縁関係ゆえに越後高田城主としての資格があったといえよう」と、家康と家次との血縁関係に重きを置いている。<sup>27</sup>

家次が武田信吉の水戸移封以後も臼井領に在留したこと、忠輝の川中島移封に伴って上野国高崎へ移封したこと、これらは忠輝との縁戚関係が作用したと考えてよいだろう。しかし、関東外縁部の押さえとしての役割を期待され、忠輝改易後に徳川氏一門の補佐役としての立場を超えて越後国高田十萬石を領する大名となり得たのは、忠輝との縁戚関係のみではなく、家康との血縁関係、譜代の家臣としての酒井家の家格、そして臼井領以来の奥羽方面に対する備えという酒井氏の役割が、意識的に継続していたからこそと思われる。

家次の子・忠勝が松代に移封すると、鳥居忠政の娘（元忠の孫）の鳥居姫と婚姻を結んでいる。<sup>28</sup>元和八年（一六二二）、最上氏が改易されると、この縁戚関係をもって鳥居氏は出羽国山形へ、酒井氏は庄内へと移封することとなる。鳥居姫と忠勝の婚姻自体、奥羽方面の押さえとしての両家の意識が結びつけたものと考えすることは穿ち過ぎだろうか。

【表】伊達政宗・酒井家次関係文書および記録

No.	年月日	資料名	受取	内容	出典／刊本
1	(慶長 15 年) 11 月 28 日	伊達政宗 書状	酒左衛門尉（酒井 家次）様 御返酬	「御成」の日程および茶事 の「御礼」の「御免」	酒井忠久氏所蔵 文書
2	(慶長 16 年) 4 月 22 日	伊達政宗 書状	酒左衛門尉様 御 返酬	家次の参府、政宗の仙台下 向と松平忠輝への「御成」	庄司建一氏所蔵 文書／『仙』11- 1318
3	(慶長 18 年) 正月 5 日	伊達政宗 書状写	酒左衛門尉様 人々御中	家次から書状と小袖が贈ら れた御礼、茶事につき	『御世紀』四／『御 世紀』198 頁
4	(慶長 18 年) 正月 7 日	伊達政宗 書状案	酒左衛門尉様 御 報	家次へ「御見廻」のところ 留守	『引証記』 二十三／『仙』 11-1358
5	(慶長 18 年) 3 月 8 日	伊達政宗 書状	柳又右(柳生宗矩) 様 人々御中	酒井忠勝邸への訪問につき 10 日か 11 日、いずれにし るかの相談	高德院所蔵文書 ／『仙』11-1381
6	(慶長 18 年) 3 月 10 日	伊達政宗 書状案	小沢瀬兵衛(忠重) 様	「他行」にて会えなかった が、酒井忠勝と同道して訪 ねてきた御礼	『引証記』 二十三／『仙』 11-1382
7	(慶長 18 年) 3 月 10 日	伊達政宗 書状案	酒室内太輔（酒井 忠勝）様	忠勝の「御振舞」に対する 御礼	『引証記』 二十三／『仙』 11-1391
8	(慶長 18 年) 3 月 10 日	伊達政宗 書状案	酒左衛門尉様	忠勝よりの振舞の礼、武州 府中での鷹狩り	『引証記』 二十三／『仙』 11-1392
9	(慶長 18 年) 3 月 11 日	伊達政宗 書状案	小瀬兵衛（小沢忠 重）様	忠勝と家次への御礼	『引証記』 二十三／『仙』 11-1399
10	(慶長 18 年) 4 月 26 日	伊達政宗 書状案	酒井左衛門尉様	家次への返書。駿府出仕中 のこと、鷹の手配	『引証記』 二十三／『仙』 11-1451
11	(慶長 18 年) 5 月 16 日	伊達政宗 書状	酒左衛門尉様 人々御中（カ）	今晚の「御礼」、金森可重 と佐久間安政・勝之兄弟が 参ること	個人蔵／『せん だい』23- 補 110
12	(慶長 18 年) 5 月 28 日	伊達政宗 書状写	酒左衛門尉様 人々御中	いつ頃「御在所」へ帰るの か、藤堂高虎邸への「御成」 まで逗留するのかわ尋ね	『御世紀』四／『御 世紀』198 頁
13	(慶長 18 年) 9 月 1 日	家次より書状・羽二重紅白 10 匹、忠勝より書状が到来 のため、返書および小袖一重・羽織一を贈る			『貞山公治家記 録』巻二十三／ 『伊達』593 頁
14	(慶長 18 年) 9 月 20 日	忠勝へ書状、兄鷹 1 居を贈る			『貞山公治家記 録』巻二十三／ 『伊達』594 頁
15	(慶長 18 年) 11 月 24 日	家次へ返書および黄鷹 1 居、忠勝へも返書			『貞山公治家記 録』巻二十三／ 『伊達』598 頁
16	(慶長 18 年) 12 月 19 日	伊達政宗 書状案	酒左衛門尉様	返書。家次の元へ鷹参着の こと	『引証記』 二十三／『仙』 11-1488

No.	年月日	資料名	受取	内容	出典／刊本
17	(慶長 19 年) 8 月 28 日	大風により酒井家次屋敷・家門共に傾倒			『貞山公治家記録』巻二十三『伊達』614 頁
18	(慶長 19 年) 10 月 21 日	伊達政宗 書状案	酒左衛門尉様 御報	鮭・鯉贈預の御礼、大坂冬の陣にあたり陣替えにつき	『引証記』 二十四中 / 『仙』 11-1553
19	(慶長 19 年) 10 月 23 日	伊達政宗 書状案	酒左衛門尉様	冬の陣関連。政宗小田原到着、家次は酒匂に陣取ったか確認。	『引証記』 二十四中 / 『仙』 11-1557
20	(慶長 19 年) 10 月 25 日	伊達政宗 書状案	酒左衛門尉様 御報人々御中	返書、冬の陣関連。家次三島へ到着、政宗江尻泊まり	『引証記』 二十四中 / 『仙』 11-1558
21	(慶長 19 年) 10 月 28 日	伊達政宗 書状案	酒井左衛門尉様	冬の陣関連。政宗見附へ到着、徳川秀忠懸川到着。	『引証記』 二十四中 / 『仙』 11-1560
22	(慶長 19 年) 12 月 1 日	伊達政宗 書状案	酒井左衛門尉様 人々御中	冬の陣関連。爰元外町地焼けにつき「引籠」、木津表へ陣替え	『引証記』 二十四下 / 『仙』 11-1581
23	(慶長 19 年) 12 月 9 日	伊達政宗 書状案	酒左衛門尉様 御報人々御中	返書、冬の陣関連。家次「仕寄」、政宗足軽 3000 人へ振舞	『引証記』 二十四下 / 『仙』 11-1586
24	(慶長 19 年 12 月)	伊達政宗 書状趣意文	(酒井家次)	返書、冬の陣関連。家次「仕寄」「土山御築」、和議「事切」との噂	『治家記録』 二十四 / 『仙』 11- 参考 43
25	(慶長 20 年 5 月)	伊達政宗 書状趣意文	(酒井家次)	定家の墨蹟について	『治家記録』 二十五下 / 『仙』 11- 参考 44
26	(慶長 20 年) 閏 6 月 3 日	伊達政宗 書状	本上州(本多正純) 様 人々御中	夏の陣関連。酒井家次が天王寺・岡山合戦で叱責を受けたが赦免されたことについて、「内々御取成」の御礼	『引証記』 二十五下 / 『仙』 11-1658
27	(元和 2 年) 12 月 26 日	家次・忠勝へ書状を送り、鷹一居を贈る			『貞山公治家記録』巻二十六 / 『伊達』693 頁
28	(元和 3 年) 12 月 20 日	嗣子・忠宗と秀忠養女・振姫との婚礼の祝儀として家次へ腰物(来国行)を贈る			『貞山公治家記録』巻二十六 / 『伊達』693 頁
29	(年末詳) 3 月 6 日	伊達政宗 書状	酒左衛門尉様	先日江戸城で会ったこと、地元のもの種進上	東京古典会目録 / 『仙』 11-1787

刊本の『仙』は『仙台市史』資料編 11 伊達政宗文書 2 (2003 年)、『御世紀』は『庄内藩主酒井家文書史料集 2 御世紀』(致道博物館、2022 年)、『伊達』は『伊達家治家記録 性山(輝宗)公 貞山(政宗)公』(藩祖伊達政宗公顕彰会、1938 年)、『せんだい』は『市史せんだい』23 (2013 年) の略。



#### 四 酒井家次と伊達政宗の交流

最後に、家次と伊達政宗がどのような関係を築いていたのか史料を通覧する。【表】は家次・政宗関係文書および「貞山公治家記録」記載の関係記事を一覧にしたものである。文書関係はほぼ『仙台市史』に拠っており政宗発給文書のみである。家次から政宗へ送った書状などは今のところ管見に触れず、調査不十分の感は否めないが、以下、【表】のなかからいくつか史料を選んで紹介しながら、両者の関係性について言及したい。以下、引用史料は【表】のNoで示すこととする。

前節で掲げた「酒井家次周辺人物関係図」に伊達政宗の名が挙がっている通り、松平忠輝の室は伊達政宗の娘・五郎八姫である。はじめに述べたとおり、家次と政宗は「格別に御懇志」という関係であったが、それは単に同世代であるというだけではなく、忠輝の岳父が政宗であることも理由であった。現状、家次と政宗の関係が窺える初見は、今回紹介した慶長十五年（一六一一）の【史料1】（No1）である。忠輝と五郎八姫は慶長四年（一五九九）に婚約しており、同十一年に婚姻を結んだ。こうして考えると、両者が親密な交流をもつようになったきっかけは、やはり慶長十一年の忠輝と五郎八姫の婚姻であっただろう。

No2では、政宗がいつ仙台へ下向出来るのか分からない旨を家次に報じた際に、「上総守様へ之御成過候者、臆而可罷下与存候」と述べている。「上総守様」とは松平忠輝のことである。ここでは、忠輝邸への「御成」が済んだならば仙台へ下向出来るだろうと見通しを述べており、「御成」に際して岳父として見届ける立場にあったことが窺える。家次とのやり取りのなかで、忠輝邸への「御成」を話題に出す点、家次と忠輝の関係性がある故のことと察せられる。

なお、政宗は、忠輝に「様」を付けて敬意を示している。試みに政宗が陸奥守を名乗る慶長十三年から家次が亡くなる元和四年（一六一八）頃までの政宗発給文書を眺めると、政宗は本文中に人の名前を記す場合、「様」か「殿」か、あるいは「方」「所」や何も付けないか、厳格に身分差を意識していることが分かる。当該期に「様」を付けているのは、①徳川家康（「大御所様」「前右府様」「相国様」）、②徳川秀忠（「公方様」「上様」「將軍様」）、③徳川家光（「若様」）、④徳川頼宣（「常陸様」）、⑤松平忠輝（「上総守様」「少将様（越後少将様）」、元和二年に改易されると少将殿と表現されるよ



うになる)、⑥松平忠直(「越前宰相様」)、⑦豊臣秀頼(「秀頼様」「秀頼公」、大坂の陣以降は敬称無し)、⑧淀殿(「御袋様」)、⑨近衛前久(「竜山様」)、である。基本的に「様」を付けるのは、①～⑥のような徳川氏一門に限定していることが分かる。⑦～⑨は身分や関係性からいえば、「様」が付いてもおかしくない例外と捉えてよいだろう。忠輝は政宗の娘婿といえど、徳川氏一門であるため「様」を付けて政治的な配慮をみせている。

No.3～16までは、慶長十八年中のことである。なかでもNo.5～9は、家次の嫡子・忠勝と政宗との交流が窺えるものである。忠勝は慶長十四年に元服しており、この時数えて二十歳。政宗に対する忠勝の「御振舞」に対し、政宗は家次に「御亭主振、残所無御座候」と述べている。忠勝の「亭主振」を称えているところからすると、政宗に対する忠勝の初めての「振舞」だったのかもしれない。その後も政宗は、忠勝に対しても書状を送っている(No.13～15、27)。

茶事や饗応に関するやり取りが多いなかで、慶長十九年には大坂冬の陣関連の史料が多くある(No.18～24)。冬の陣に際し、政宗は仙台から江戸へ上り、十月十七日に江戸城へ登城して徳川秀忠に拝謁。秀忠は同月二十三日に大坂へ向けて出発するが、政宗は秀忠本軍の前をゆく「御先手」を命じられ、二十日に江戸を発っていた<sup>29</sup>。秀忠は譜代大名や関東周辺の名を中心に編成した大軍勢を率いた。中でも家次は秀忠率いる本軍の一番隊筆頭に名が挙げられ、ここでも戦時における譜代筆頭としての酒井家の立ち位置が表れている<sup>30</sup>。

先発した政宗は、道中、何度も家次と書状をやり取りしている。大軍勢が東海道を進むこととなるため、「宿陣」をどこに定めるかは重要な問題であったようだ。さらに、秀忠本隊の進軍が想定よりも早く、先発した伊達軍に追い付きそうな勢いであった状況も窺える。十月二十八日の家次宛ての書状では(No.21)、自らは今見附にいて、明日吉田に向かうつもりでいるが、仙台から江戸へ来てすぐの強行軍であったためか「人馬草臥申事、御察三不可過候」と述べている。さらに、秀忠本隊も明日吉田に泊まるというほど進軍していることを聞き及び、こうなっては「御先江参事なと難成候」と言っている。秀忠の「馬取」でもしながらお供するつもりだと述べている。本軍の一番隊にいる家次と密に連絡を取り合っている様子が窺える一連の史料である。

もうひとつ、家次と政宗の親密な関係を示す史料として、慶長二十年閏六月三日、政宗から本多正純に宛てられた史料

がある(No.26)。そこには、「酒左殿之事、御前相済申之由申来候、扱々目出度存候」とあり、酒井家次のことについて「御前相済」んだことを聞き嬉しい限りだ、と記されている。この史料のみでは、内容は分からないが、「貞山公治家記録」には、同日の項に本書状が写された後、「左衛門尉殿此節御呵ヲ蒙ラレ、公ヨリ内々御侘言ヲ仰上ラレ御免許アリシト見ヘタリ」とある。これによれば、家次が(おそらく家康から)お叱りを受けたが、政宗が内々に「侘言」をしたお陰で許されたらしい。お叱りの詳細は分からないが、時期的には大坂夏の陣での出来事だろうか。No.26には、先の記載に続いて「内々御取成故与、於我等別而忝存候」と、内々に家康の側近である本多正純が取り成してくれたことに感謝している。そして、「出角之様二御座候へ共、御家に久敷人二候間、笑止二存候」と、出過ぎたこととは思えど、(酒井家は)徳川家にとって馴染みのある家柄なので心を痛めていたと述べている。「治家記録」にあるように、政宗から本多正純へ取り成しのお願いがあったのだろう。そして、「御家に久敷人」との表現からは、政宗が家次、ひいては酒井家と徳川家とが近い関係性であったことを公然と認識していたことが出来る。

### おわりに

酒井家次と伊達政宗とは、縁戚関係としては遠いものであったが、徳川家康の六男・松平忠輝を介して繋がりをもった。政宗にとって忠輝は娘婿であり、徳川家と血縁関係をもつことで奥羽最大の領国をもつ大名家として、徳川氏権力内における立ち位置を盤石なものとした。家次にとって忠輝は又甥という関係であった。母・碓井姫の初婚先である長沢松平家との縁戚関係であり、四親等とは言え決して近い関係性ではない。しかし、忠輝を援助する役割を担い、それは酒井氏の領国配置の在り方にも影響するものであった。

忠輝と五郎八姫の婚姻は慶長十一年であり、忠輝を介した家次・政宗の親交はこれ以降のこと。両者は同世代ということもあり、慶長年間後半には多く書状をやり取りして公私共に深く繋がりをもった。本稿で紹介した三つの新出史料は、将軍の「御成」や茶事に関するものである。相手に敬意を表しながらも、些細なことでも遠慮無く言い合える関係性にあ

ることが窺える。四節では、両者の関係史料を大づかみに紹介するに止まったが、両者の親交が単なる付き合いや馴れ合いではなく、外交的な情報交換を伴うやり取りが多いことに気付く。慶長・元和年間という時期が生み出す感覚だろうか、大名同士の交流に「私」と「公」との差異を見出す意味はあまり無いように感じる。むしろ彼らにとっては、すべて「公」としての活動なのだろう。

例えば、大坂夏の陣の後、家康から家次がお叱りを受けたとされる事態に際しては、政宗が家康の側近・本多正純に取り成しをお願いして事無きを得ている。一見、親交のある家次のため、という形に見えるが、政宗は「御家に久敷人」である故に気の毒に思っていたと述べている。「徳川氏譜代の家柄」である酒井氏が徳川氏にとって重要な家であることを公然と意識しているのである。政宗にとって、その酒井氏と親交（外交関係）をもつことが政治的にも重要な意味をもったのだらう。では、このような家格をもつ家次は徳川氏権力内においてどのような役割を期待されたのか。

天正十八年（一五九〇）の徳川氏の関東転封に伴い、家次は白井三万石を領することとなる。下総国境の矢作四万石は鳥居氏が領していた。白井は、もし北関東や奥羽方面で問題が生じた際には後方支援が可能な位置にある。また、転封当初の関東徳川領国は、小田原北条氏との戦乱直後ということもあり、在地の状況把握が困難であった。徳川家康の四男忠吉が入った忍領と相似する状況から併せみると、家康の五男・武田信吉が文禄元年（一五九二）に佐倉領へ入ることは予定されていたことなのかもしれない。家次には、白井に入って関東領国東面の備えと共に、徳川氏一門で甥の信吉を支える役割が期待されたのである。

本多・榊原・井伊三氏は秀吉の意向によって十萬石、あるいは十二萬石を与えられて領国外縁部の守衛に当たっている。実績充分の五十二歳鳥居元忠は矢作四萬石。父・忠次から代を継いで二年、未だ大きな実績があるわけでもない家次に白井三萬石が与えられたことは、譜代のなかでも破格の扱いであり、酒井家の家格の高さを表している。家次は、甥の信吉、又甥の松平忠輝という縁戚関係を伴う徳川氏一門の補佐という役割を担い、本領国周縁部の白井、その後の上野国高崎五萬石、元一門領（旧忠輝領）である越後国高田十萬石を任せられている。徳川氏一門に擬するような配置転換であり、これは家康と従弟の四親等という関係性があるからこそである。白井以来担ってきた北関東および奥羽方面の押さえ

としての役割、そして縁戚関係、多面的な要素が絡んで実現した配置換えであった。

以上、新出史料の紹介、家次の縁戚関係からみた立場、家次と政宗の関係性、と纏まらない論述となってしまった。特に家次の役割・立場については、先行研究に学びながら系図関係や状況証拠をもとに机上で論じたものであり、なお検討すべき部分が多い。今後の課題としたい。

## 註

- (1) 桑田忠親『酒井忠次公伝』（先求院堂宇修繕後援会、一九三九年）。その後、徳川家臣団における忠次の立ち位置を検討した平野明夫氏の研究がある（平野明夫「三河統一期の支配体制」、同『徳川権力の形成と発展』岩田書院、二〇〇六年）。
- (2) 致道博物館発行の図録として、『徳川四天王筆頭 酒井忠次』（二〇二二）、同書収録の柴裕之「家康と忠次―二人が歩んだ徳川家の戦国時代―」、平山優「家康vs武田信玄・勝頼―戦争と外交、危機を乗り越えた先に―」がある。また、酒井家庄内入部四〇〇年記念歴史講演会の講演録『通史の中の庄内2』（鶴岡市郷土資料館編、二〇二三年）には、平野明夫「松平一族と三河の酒井家」、山田邦明「戦国時代の東三河と酒井忠次」、久保田昌希「松平家忠日記」にみる酒井忠次」が収録されている。
- (3) 前掲註2『通史の中の庄内2』収録の柴裕之「酒井家次の立場」。家次の嫡子・三代忠勝については、小川雄「徳川幕府下の酒井忠勝」がある。また、安城市歴史博物館では、酒井家の草創期から江戸時代前期までを見通した展示を行い、図録を発刊している（『安城譜代―徳川の支柱酒井氏―左衛門尉家と雅楽頭家―安城市歴史博物館、二〇二三）。
- (4) 『酒井家名宝』（致道博物館、二〇一九年）、前掲註2『徳川四天王筆頭 酒井忠次』。一部本稿にて翻刻の誤りを訂正している。
- (5) 明石治郎「伊達政宗の「捻」」（『仙台市博物館調査研究報告』四〇、二〇一九年）。
- (6) 以上、「貞山公治家記録」「当代記」ほか『仙台市史』（資料編一一、二〇〇三年、以下『仙台』と略す）や藤井讓治編『織豊期主要人物居所集成（第2版）』（思文閣出版、二〇一七年、相田文三「徳川家康の居所と行動」、福田千鶴「伊達政宗の居所と行動」）を参照した。第二節の年次比定にあたって上記史料および文献を参照している。

- (7) 『庄内藩主酒井家文書史料集2 御世紀』（致道博物館、二〇二二年）。「御世紀」の書誌情報や内容については、久保田昌希・秋保良両監修による解題に詳しい。
- (8) 【史料2】本文中の□は、史料上でも□で記載されており、「御世紀」編纂時点で欠損していた箇所と思われる。
- (9) 伊達政宗書状写（「引証記」二十三、「仙台 一一―二三五八」）。
- (10) 佐藤憲一『伊達政宗の素顔 筆まめ戦国大名の生涯』（吉川弘文館、二〇二〇年）。
- (11) 前掲註3 柴講演録。
- (12) 致道博物館蔵。前掲註7の付録。二〇二四年に致道博物館から翻刻本を刊行予定。
- (13) 二の丸殿の父である榊原政吉についてはよく分かっていないが、「御世紀付録2 宗慶公」には、先祖は伊勢国から三河国に入ったとし、小豆坂合戦や三方ヶ原合戦で戦功をあげたと記されている。榊原康政に繋がる榊原家とは同族の別家なのであろう。また、その子孫は二の丸殿の「御縁」があったことから、寛文七年（一六六七）、酒井家の分家で出羽国松山藩初代藩主・酒井忠恒の「御取持」によって庄内藩酒井家に仕えたところ。
- (14) 「家忠日記」の記載等、柴裕之氏より御教示を得た。穴山武田氏については、柴裕之「穴山信君」（丸島和洋編『武田信玄の子供たち』宮帯出版社、二〇二二年）、海老沼真治「見性院殿―穴山信君の正室」（同上）を参照。
- (15) 先行研究については、竹井英文「徳川家康江戸入部の歴史的背景」（柴裕之編『徳川家康』戎光祥出版、二〇二二年、初出二〇一四年）の「はじめに」に詳しくまとめられている。
- (16) 黒田基樹「御隠居様」北条氏政と江戸地域―戦国末期江戸の史的位位置―（同『戦国大名北条氏の領国支配』岩田書院、一九九五年、初出一九九四年）。
- (17) 前掲註15 竹井論文。
- (18) 川田貞夫「徳川家康の関東転封に関する諸問題」（小和田哲男編『徳川氏の研究』吉川弘文館、一九八五年、初出一九六二年）。市村高男「関東における徳川領国の形成と上野支配の特質」（『群馬県史研究』三〇、一九八九年）。
- (19) 柴裕之「豊臣政権の関東仕置と徳川関東領国―本多忠勝の上総万喜入城を通じて―」（同『戦国・織豊期大名徳川氏の領国支配』岩田書院、

- 二〇一四年、初出二〇二二年)。柴裕之「武田信吉の佐倉領支配―豊臣期下総領域の態様」(『四街道の歴史』一一、二〇一六年)。
- (20) 中野達哉「関東転封直後における徳川氏の知行割と検地―天正18年知行宛行の実状の分析を中心に―」(久保田昌希編『松平家忠日記と戦国社会』岩田書院、二〇二一年)。
- (21) 前掲註19柴裕之「武田信吉の佐倉領支配―豊臣期下総領域の態様」。以下、特に断らない限り本節における柴氏の引用は本論文からである。
- (22) 根岸茂夫「近世武家社会の形成と構造」(吉川弘文館、二〇〇〇年)。
- (23) 佐藤貴浩「徳川氏の関東入国と奥州の動揺」(久保田昌希編『松平家忠日記と戦国社会』岩田書院、二〇二一年)。
- (24) 前掲註16黒田論文。
- (25) 前掲註15竹井論文。
- (26) 柴裕之「徳川氏の甲斐郡内領支配と鳥居元忠」(同『戦国・織豊期大名徳川氏の領国支配』岩田書院、二〇一四年、初出二〇一三年)。
- (27) 福田千鶴「徳川幕府の越後経営―松平忠輝から松平光長まで」(『高田開府四〇〇年記念特別展 越後の都高田と徳川家康の血族』上越市・上越市教育委員会、二〇一四年)。
- (28) 「御世紀付録二達三八」。本書では、婚姻を結んだ年月日は不詳とするが、忠勝が松代を領している時代のことと記載されている。
- (29) 伊達政宗書状案(「引証記」二十四中、「仙台」一一一―一五五・一五五六)。
- (30) 秀忠本軍の構成や進軍の行程については、山本博文『徳川秀忠』(吉川弘文館、二〇二〇年)に詳しい。

〔付記〕「酒井家次周辺人物関係図」は養子関係を無視した形で線を繋いでいる(例えば、武田信吉は勝千代の子ではなく、見性院殿の養子として表現すべきなど)。また、酒井家の配置転換を考える上では、家次の弟妹や子供たちの養子縁組、婚姻関係を併せ考える必要がある。以上は、脱稿後、令和五年十二月の戦国史研究会例会にてご指摘いただいた。本稿にて訂正・追加検討は叶わなかったが、他に頂戴した指摘をふまえ、改めて検討を加えたい。